

## 序

昭和52年度における当研究所の事業をみると、美術工芸研究室の彫刻・絵画の調査、建造物研究室の近世社寺、民家、町並の調査、歴史研究室の古文書・典籍の調査のほか、平城宮跡発掘調査部は27ヶ所、飛鳥藤原宮跡発掘調査部は20ヶ所の発掘調査をそれぞれ実施している。さらに飛鳥資料館は「日本古代の墓誌」展を含む展示公開およびインフォメーションサービスをおこなって、年間14万人の入館者があり、高松塚と同数、石舞台古墳の37%の見学者がこれを利用したことになり、開館4年目にして今や飛鳥地域の見学に欠かせない施設として定着してきた。埋蔵文化財センターは全国埋蔵文化財発掘調査技術者に9コースの研修を実施し、167名の研修生を送り出すとともに、北海道から沖縄におよぶ全国各種発掘調査地域への技術指導79ヶ所におよぶなど、きわめて多岐にわたる事業を実施してきた。この間学報4冊を含む13種の出版物を刊行することができた。

この他に平城宮跡、藤原宮跡の買上地および橿原市今井の重要文化財米谷家住宅の管理をおこなっている。平城宮跡をおとずれた人は前年度比20%増の40万人に達し、藤原宮は1万人、米谷家は5千人の見学者を数える。平城宮跡利用者の調査によれば、見学54%、遠足34%、休養7%、運動3%となっており、遺跡活用面での成果とともに周辺住民の都市公園的利用も定着してきている。このように整備の実施ならびに維持管理は当研究所の直面する大きな課題となり、文化庁もこれを汲み取って「平城遺跡博物館基本構想」を策定されたので、今後その線にそった管理組織も軌道に乗る期待がもてることとなった。

今一つ52年度の大きな事業は春日野・平城宮跡地区庁舎の統合移転が予算化したことで、3年間で移転する計画が実施されている。関係方面の御理解と御援助によって多年の懸案が解決したことを御報告できることは大きな喜びである。本年報を御高覧願えればかくも多彩な研究所事業の一端を御理解いただけると考えるとともに変らぬ御指導、御鞭撻を賜らんことを願ってやまない。

1978年8月

奈良国立文化財研究所長

坪 井 清 足